

世界中の子どもたちへ

Lindgren loved by the Swedish



ピippiの生みの親

リンドグレンが愛したスウェーデン

児童文学作家としてだけではなく、社会のオピニオンリーダーとして、そして一人のスウェーデン人として、スウェーデン国民が心から敬愛する女性、アストリッド・リンドグレン。「長くつ下のピippi」「やかまし村の子どもたち」「ロッタちゃんシリーズ」など、日本でも絶大な人気を誇るリンドグレンの作品と、彼女の生き方を通して、スウェーデンという国を見つめます。

1 愛と自由と子どもたち

「自由な国」の、自由な女の子。

三人の子は、だまって、顔をみあわせていましたが、とうとう、トミーが口をきりました。「きみ、なぜ、うしろむきにあるいてたの？」すると、ピippiはいいました。「なぜ、うしろむきにあるいたか？...わたしたちの国は、自由な国じゃないこと？ わたしがすきなようにあるいちゃ、いけないかしら...」



『長くつ下のピippi』 桜井 誠 絵

左右の色が違う長い靴下、ぶかぶかの靴、ニンジン色のおさげ髪にたくさんのそばかす、肩の上にはサルニルソン氏：長くつ下のピippiと出会う子どもたちは、皆たちまちピippiの魅力の虜になります。そして「ピippiのような女の子が、隣りに住んでいれたいのに...」と思い、そのうちに自分自身が「ピippiになりたい！」と願うのです。大人の常識に縛られず、次々と荒唐無稽な遊びや冒険を思いつくピippi。世界一強い女の子、ピippi—この物語が出版された1940年代のスウェーデンでは、まだ児童に対する古い、支配的な考え方が主流だったので、ピippiは一部の教育家たちから「いい子の基準を脅かす」として批判されました。しかし一方では「無邪気な遊びが道徳的に許されない社

会だからこそ、このような物語が必要なのだ」と絶賛する声も多くあり、賛否両論、国内外にセンセーションを巻き起こしたのです。論争の結末は——？ 誰の目から見ても明らかです。21世紀になった今でも、「長くつ下のピippi」は世界中で翻訳され、世界中の子どもたちから愛され続けているのですから。

て私たちは、遊んで、遊んで、遊びました。『遊び死に』しなかったことが不思議なくらいでした」

が、彼女の作品を手取る人々の記憶を照らし、郷愁と憧れで心を震わせるのかもしれない。

子どもたちに、愛を。

スモーランド地方のヴィンメルビー郊外で、4人兄妹の2番目として生まれたリンドグレンは、美しい自然に囲まれて過ごした自らの子ども時代について、こう記しています。

「遊び死に」しそうなくらい遊んだという子ども時代：「ピippi」や「やかまし村」で繰り広げられる遊びの数々は、ほとんどそのままリンドグレン自身が幼い頃に夢中になった遊びでした。安心と自由に満ちた子ども時代：その輝き

遊んで、遊んで...

「2つのことが、私たち兄妹の子ども時代を幸福なものにしました。安心と自由です。お互いに愛し合う親がいつもいるということ、は、私たちにとっては安心を意味するものでした。(中略)...そし



『やかまし村の子どもたち』 イロン・ヴィークランド 絵

「私は私自身の中にいる子どもを喜ばせるために書いてきた



サミュエル＝オーガスト・エリクソン一家 (1918年頃) 左からサミュエル＝オーガスト、インゲヤード、アストリッド、ステイーナ、グンナル、ハンナ

出典：『ピippiの生みの親 アストリッド・リンドグレン』

人間として尊重され、体罰またはその他精神的虐待を受けない(スウェーデン親子法6章第一条より抜粋)という法律へと結びつき、図書館の縮小を食い止め、ストックホルムに「アストリッド・リンドグレン病院」という、子ども専門

Present

リンドグレンの代表作『長くつ下のピippi』を抽選で3名の方にプレゼントいたします。ご希望の方は、同封のコミュニケーションカードまたは官製はがきに、賞品名・住所・氏名・年齢・電話番号・メールアドレスを明記の上、ご応募ください(7月20日消印有効)。官製はがきでご応募の場合、P26の「お便り募集」の宛先までお願いいたします。なお、当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。



※文献は岩波書店発行、アストリッド・リンドグレン作「長くつ下のピippi」(大塚勇三訳)によります。